

知的障害者の幸せのために

—ある会社での実践—



増田 尚子

[埼玉県/中学校教諭/41歳]

私は中学校の障害児学級の担任です。知的障害を持つ子や、自閉症などの情緒障害を持つ子たちを受持っています。

今、通常学級では、中卒で就職する生徒は本当にわずかしいませんが、障害児学級では、卒業後すぐ就職する生徒が毎年何人かいます。

もちろん、養護学校高等部に進学する生徒も最近ふえてきていますし、障害を持つ彼らこそ長い時をかけて教育するべきだという声もききます。でも、社会自立をめざすためには机上の勉強よりも、実生活での生きた勉強の方がより大切だと思うので、働く力を持った軽度の障害の子たちには、積極的に就職を勧めてきました。

人はだれでも働きたい、だれかの役に立ちたいという気持ちがあります。私の経験によりますと、その気持ちは知的障害を持った人たちも同じです。ノーマライゼーシヨ

ン・ということばを最近よく耳にしますが、その第一歩はまず、障害者に働く場を提供することではないでしょうか。

障害児学級で就職を希望する子たちは、中学三年の夏休みに職場実習をします。職場実習とは、いわば就職のためのテスト期間で、働く力があるかどうかを企業主の方に見てもらうのです。その職場実習先をさがすのが、私達、障害児学級担任の大切な仕事で、職場開拓といっています。私達は、卒業生が働いている企業や職安からの紹介、担任どうしや親たちからの口コミ等で、障害者雇用に理解ある企業をさがします。しかし、実習すら受け入れてもらえない企業、また実習はさせてもらっても採用にまで至らない企業も多くて、知的障害者が就職することの困難さをつくづく感じます。

といつても、障害児学級を受持つて十年めになりますが、その間に何人かの理解ある事業主の方と知りあいになりました。その中でも特に、くつ底製造メーカーの㈱ニュー・オタニの社長さんの実践は、本当にすばらしいのです。ニュー・オタニというと、ホテルのニュー・オタニと間違いやすいのですが、こちらの会社は、社長さんの名前が尾谷さんというので、ニュー・オタニという社名になったそうです。大手メーカー、アシックスのくつ底だけをつくっている従業員二十二名の会社です。

この会社を知ったのは、五年前、クラスの生徒のお母さんから紹介されたことがきっかけでした。ちょうどその年、夏に実習したけれど採用してもらえなかった女生徒がいて、十二月

に実習をお願いしました。彼女はマキちゃんといひ、手先は器用でまじめな子なのですが、対人関係が苦手でクラス内でもほとんどしゃべらない子でした。そのため、採用してもらえらるかどうかがハラハラしながら実習期間をすごしました。案の定、会社では全くしゃべらず、社長さんから

「話しかけても全然しゃべらないし、仕事が終わっても『終わりました』と言えないんだね」と言われて、もうだめかと思いました。でも、

「うちではこしばらく学卒の若い人を採用してないんだけど、会社も軌道にのつてきたことだし、若い人を育ててみようと思う。マキちゃんは、しゃべらないけど教えれば仕事はできるようになると思うから、うちで採りますよ」と内定の返事をいただきました。

さらに驚いたことに、社長さんがマキちゃんの卒業式まぎわに学校を訪れ、

「学校でのマキちゃんの様子をみて、これから会社でどういうふうに指導していくか考えたい」と言い、半日ほど学校の授業を見学していきました。そして卒業式の日には、マキちゃんあてに卒業祝いの花束がとどきました。

マキちゃんは対人関係は苦手ですが真面目な性格で、入社してからの一年間、無遅刻・無欠席でした。仕事も一年間でほぼ一人前になりました。マキちゃんの仕事ぶりを見た社長さんは、次の年、ひろし君を採用してくれました。

この年の三月、ひろし君の正式な入社が決まつてすぐ、社長さんがまた学校を訪れました。ひろし君の様子を見たあと、社長さんは、

「今度、会社で勉強会を開こうと思う。中卒で入社した子は、卒業後全然勉強しないと、せっかく学校で勉強したことを忘れてしまうでしょう。それでは先生方がいっしょうけんめい教えたのにもつたいないじゃありませんか」と私に言いました。そして、

「だれか週一回くらい教えてくれる人はいないですかね」

ときかれ、会社を退職していた私の父に、その役を頼みました。父は教員だったわけではないのですが、これまで何回も人に頼まれて家庭教師や読書会の講師をしたことがあります。知的障害を持つ人を教えるのは初めてだったのですが、快く引受けてくれました。

初めはマキちゃんとひろし君だけではじめた勉強会も、その年の途中から入社したウツちゃんとかとし君も加わり、四人になりました。ウツちゃんととし君は他の学校からの卒業生です。そしてさらに、私の教え子のあつし君とチホちゃんを翌年と翌々年に採用してもらい、やはり私の教え子で授産センターを経て入社してきたミツちゃんも加わり、勉強会のメンバーは現在七人にふえました。私は父から教え子たちの様子を聞くのが楽しみです。父は言います、

「彼らにも学びたいという強い気持ちがあるんだね。また、みんなとても明るくて、いっしょにいると楽しいし、仲間を思いやる心には感動する」と。

このように、教え子たちを次々と採用していただきありがたいことだと思いつつも、七人も知的障害者を雇用して採算は合うのだろうか、と心配になってしまいます。ところが社長さんは、

「この子たちも一年たつとほぼ一人前になります。パートさんより役立つくらいです。私のところも企業ですから採算が合わなければ採用しません」

と、きっぱりと仰うのです。そして、さらにこう言います。

「この子たちはすべて、私が直接指導します。いろいろな人が教えると混乱してしまうからです。私が不在の時は弟の専務が教えます」

これが、ニユー・オタニで知的障害者の離職率がゼロという驚異的な記録の秘密だと思えます。他の企業では、社長さんは理解があつても、直接現場で指導する従業員たちとの人間関係がうまくいかなくなり、離職してしまう知的障害者の例を見聞しますが、ニユー・オタニでは、そのような例は全くありません。

また、社長さんは、普段は優しくどこちらかという口数も少ない方ですが、仕事の指導のかたには、かなり厳しいものがあります。やはり女の子たちには、それほどきついとは言いませんが、ひろし若やあつし君は入社当時、よく失敗しては工場中にひびく大声でどなられ、涙を流したことも何回もあつたようです。でもそれは、知的な障害を持つ人もかならず一人前に仕事ができるようになるんだという信念に基づいた厳しさであり、彼らを一人の人間として認

めていることに他ならないのだと思います。

時々、教え子の様子を見に、ニユー・オタニに立ち寄ることがありますが、いつ行っても社長さんも専務さんも奥さんも、従業員にまじつて忙しそうに立ち働いています。勉強会のある日は子ども達に早く仕事を終わらせ、学習室になっている社長の自宅へ子ども達を行かせます。子ども達が勉強している五時～七時の間、社長さん達はまだまだ仕事が終わらず、残業をするので。また、父がいただいてくる授業料は社長さんが支払つて下さり、子ども達は全く無料勉強をさせてもらつているのです。

それだけではありません。会社のある春日部市では、知的障害の子を持つ親の会が、学校を卒業した子のための青年学級を月一回、開いています。そこに、マキちゃんをはじめ私の教え子たちも参加しているのですが、社長さんも毎回参加して、彼らといつしよにバレーボールをしたり、和太鼓の練習などをしてくるのです。また、勉強会のメンバーの一人、ふとし君は幼いころ両親が亡くなり、施設で育ちました。十八歳になった今年、施設を出なくてはならなくなり、アパートに移りました。しかし、食事の支度や金銭管理などうまくいかないことも多いようです。そこで、社長さんは近い将来、グループホームをつくる計画をたてはじめたそうです。

このように、社長さんは単に障害者雇用にとどまらず、雇用した彼らの幸せを追求しているような分野に活動の手を広げはじめています。これらの、数々の社長さんの活動は、私にとつて尊敬を通りこして畏敬の念さえ感じます。

マキちゃんが入社してから五年の月日がすぎました。勉強会のメンバーたちは、みな元気に仕事も勉強も頑張っています。先日、会社に立ち寄ると、奥さんが私を見て、

「先生、マキちゃんは今まで恥ずかしくつて、会社で出すお茶もジュースもお菓子もいっさい手を出さなかつたでしょ。それがこの夏からジュースを飲むようになったの。五年かかりましたね」と自分の子のこのように、うれしそうに私に知らせて下さいました。彼らを長い目で見たたかく見守る奥さんのことばは、私はなんだか、涙がこぼれそつでした。